



TITLE:

1941年度對衝に於ける火星協同觀測結果報告(3)

AUTHOR(S):

伊達, 英太郎

CITATION:

伊達, 英太郎. 1941年度對衝に於ける火星協同觀測結果報告(3). 天界
1942, 22(255): 278-281

ISSUE DATE:

1942-08-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168434>

RIGHT:

1941年度對衝に於ける 火星協同觀測結果報告 (3)

Reports on Mars Observations in 1941.

遊星面課長 伊達英太郎 E. Date.

第2區—— $10^{\circ} \sim 70^{\circ}$

(マルガリチフェル灣, エリツレム海, オイロラ灣附近)

海 この地區で最も眼に付く大きい海としては**エリツレム海**で、其北端東部の一角を形づくるのが**オイロラ灣**である。マルガリチフェル灣については、バンドー海峡を説明したついでに詳述したので、ここでは省略する。このマルガリチフェル灣と、西方のオイロラ灣の間は、地峽狀となり、**ピレ地方**と呼ばれてゐるが、ピレ地方の北端は廣くなつて、この部分を**エオス**と稱し、オイロラ海峡を隔て、**アロマチック岬**に對してゐるが、前田氏はこのピレ地方を、美しい標準形に觀測してゐる。(第2圖)。

オイロラ灣は、其の形狀が圓形になつたり、角張つた形になつたり、變形するが、今回は圓形を呈してゐた如く見受けられる(前田氏、伊達)。只渡邊氏によると、マルガリチフェル灣に似た圓錐形を呈してゐるが、これは同灣が像の縁に近い爲、細長く見えたものと考へるべきである。

アルジレ大陸の北方一帯の**エリツレム海**は、オイロラ灣、メリディヤニ灣の濃度に比較すると、半調部と稱しても良い。このエリツレム海の青灰色に對し、其の南部に位する圓形の大陸**アルジレ I**は、コントラストにより特に黄橙色が強く見られる傾向があり、今回の對衝にも、非常に判然とした黄白色を感じた。アルジレ I の西部にある**オギチス地方**は、前田氏の色彩スケッチによると、白色が非常に強い。

北半球に移つて、北半球唯一の海と云はれる**アシダリウム海**を見るには、今次の對衝は不適當である事は、前述の理由で明らかである。事實、全見取圖中に、アシダリウムを書いたものは1枚も認められないが、只1枚、渡邊氏の十月23日2時の見取圖の、右下隅に、運河狀の淡黒い斑紋が畫かれてゐるが、これは、運河かアシダリウム海の一部が見えてゐたのか、一寸疑問である。

運河 アシダリウム海から**ルナ湖**(月湖)に走る2本の太い**ニロケラス**は、北半

第 2 圖



球の良く見える對衝には非常に濃い著しい存在であるが、今次の對衝には殆んど認められてゐず、只村山氏のスケッチ中の數枚にルナ湖と共にニロケラスの北西部の一部が畫かれてゐる。因にルナ湖は大きい2ヶの斑點に觀測されてゐる、

次に著しい運河の一つとしてオ1ロラ灣からルナ湖に走るガンジスとイステルの2本がある。この兩運河に狹まれた地方は、半調色であるが、時として非常に濃化して恰も1本の頗る太い運河（否、もうこれ位太くなると“運河”とは呼ばれず“海峡”と稱すべきだが）となり觀測者を面喰はす事があるが、1939年度は其一例だつた。今回は、餘り濃くなく、半調色で、太い運河狀を示したが、村山氏の見取圖中には兩側のガンジス・イステル兩運河を認めてゐる。

ガンジスの西側に、火星面中、最も濃い模様として有名なイッペンタ泉と、これもオ1ロラ灣を結ぶ細いベチス運河があるが、これは、今年も餘り著しく濃くなかつた模様で、只前田氏の見取圖 No.2（十月10日23時15分、本誌本號口繪第14圖參照）に、相當濃く畫かれてゐるが、同 No.12（十一月17日22時0分）の見取圖には全然現はれてゐない事を見ると、この地方一帯には、雲の出現が頻繁な爲か、又は濃いが、小さく、且、細い模様である爲、良視狀と、相當の大きい口徑を要するかの、どちらかであらうと思考される。

オ1ロラ灣からチトニウス湖に走るアガトデモン運河は、軽くカ1ブした美しく、且、濃い運河で、10縐級にも明らかに認められる。今回も10縐級以上を使用した觀測者全部によつて見られてゐるが、前田氏の色彩スケッチによると、綠灰色に畫かれてゐる。

第3區——70°~120°

（ソリス湖、タウマジャ、タルシス地方）

海・湖この地區としては、海と呼ばれる區域無く、只、南極附近—60°邊迄の一帶をオ1ストラレ海（南海）と稱されてゐるが、南極に近い爲、詳細な觀測を遂行する事は困難で、一帶に半調色の廣い廣がりを見るのみである。

ソリス湖の東南に當る一帶は、フリキシ地方と呼ばれ、その兩端に當る特に黒い斑點をコラスシス港及デルフィニ港と呼び、このコラスシス港の南部に接する暗斑はボンチカ低地と呼ばれてゐる。これ等はアントニヤヂ氏によつて命名されたものであるが、この中、コラスシス港及ボンチカ低地は今回の對衝に特に著しく、前田、渡邊の兩氏及木邊部長に依つて確認された（本誌前號及本號口畫寫眞 90°中心のスケッチ集第8, 9, 14圖參照）

ボンチカ低地とその西方ベチス港との間にある長三角形のクリソケラス地方は、今回の對衝には明瞭に認められ、特に渡邊氏に依つて十月3日21時に非常に明瞭に其形狀がキャッチされた。

ベチス港は相当濃い斑點を示し、15緞級の器械にも認められた。

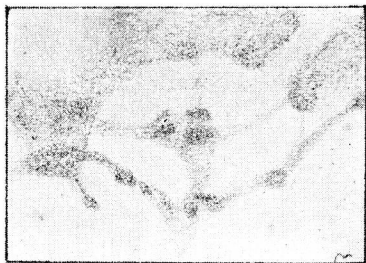
次いで、この地區最大の觀物たるソリス湖（太陽湖）に移る。火星の眼玉と別稱される丈に、このソリス湖が、タウマジヤ地方の中央に其偉容を示しながら、火星面中央子午線を通過する有様は、大シルチスの南中と共に、正に火星觀測の壓巻である。毎對衝毎に書く文句だが、今回は南半球が地球に傾ける丈に傾いた對衝であつたために、ソリス湖とタウマジヤ地方とは充分に觀察する事が出来た筈である。

さてこのソリス湖の形狀が、對衝毎に變形するのだが、これは、ソリス湖そのものの變形もあるけれど、ソリス湖から八方へ出てゐる運河の消長と變形にも其因はある。今回は、ソリス湖から眞北チトニウス湖へ走つてゐるカリドン運河が、濃く太く變形したため、ソリス湖の形は一見勾玉狀を呈した。この變形の確認は、小口径には少々無理であつたが、大體15緞以上の口径には認め得られた様で、20緞以上の使用者（渡邊、前田、木邊部長の3氏及筆者）に確認されてゐるが、これ以外にも村山氏（12.5緞）、富田氏（10緞及小嶋氏20緞）、賴氏（10緞）にも認められてゐる。（第3圖參照）

第 3 圖



アントニヤチー1924



東亞天文協會—1941

ソリス湖其物の形狀は、濃さが1939年度に比し濃くなつた以外、大した變化なく、20緞級の使用者には、2~3個の斑點（小湖）の集合に確認されてゐる。（本誌前號及本號口畫90°附近の見取圖參照）

ソリスの北方に並ぶチトニウス湖は、ソリスに比し稍淡いが、渡邊氏により3個の斑點に分離され、この中、最東端に當るメラス湖は非常に濃く、この地區でも最も濃く觀られた。

西へ進んで、チトニウス湖の西南にあるフォエニシス湖は今度の對衝は餘り著しい觀物ではなかつた。併し、シレヌム海の先端から走るアラクセス運河の東南端に圓く點を打つた如く見られた。このフォエニシス湖とチトニウス湖を繼ぐノクス運河は渡邊氏により確認された。

北半球に移つて、 $95^{\circ}\sim 20^{\circ}$ の邊にある**アスクレウス湖**は、只渡邊氏のスケッチ中の一枚に見られるのみで、非常に見難かつた事を物語つてゐる。

運河 最も濃いものはオリョラ灣からメラス湖へ緩い曲線を書いてゐる**アカトデモン**であつて、これは、8纏級の口徑にも認められる程、濃いものであつて、メラス湖と其濃度を競つてゐるかの如く見られた。その南方エリスレウム海とソリス湖を連ねてゐる**ネクタル**も可成り濃く、これを始めとして、**タウマジヤ**地方ソリスを取巻く車軸狀の運河の中**ベチス**、**エオスフォロス**、及前述の**カリドン**の3運河が特によく認められた。ベチス港とフォエニシス湖を結ぶ長い**フェーシス**運河は、見える年と見えない年があり、**タウマジヤ**地方の形狀を左右してゐる。1939年の大接近期には相當著しかつたが、今回は稍々淡化して、20纏級にも、惡視狀の許には見られなかつたが、十月3日夜渡邊氏が25纏300×で確實にキャッチされてゐる。(本誌前號及本號口畫スケッチ 90° 附近のもの参照) それ故、ソリス湖を圍む**タウマジヤ**地方の形狀は橢圓形に見られた。

北半球へ移つて、 $+20^{\circ}$ 以北には、淡い細い運河が相當多くあるのだが、今回は火星の傾の爲見る事は不可能であつた。

第4區—— $120^{\circ}\sim 180^{\circ}$

(シレヌム海附近)

シレヌム海の形狀を最も良く觀察する爲には、今回の對衝が最も好都合だつたと言へる。今回の對衝に於ける形狀の特徴は、先づ先端(東端)が圓く尖つてゐない事と中央部に南接して、**カラリス泉**が認められた事で(渡邊氏の見取圖に依る)、この**カラリス泉**の檢出は、南半球が極度に地球に傾いた今回の對衝なればこそその檢出で、渡邊氏の努力を多としたい。

シレヌム海の色彩は前田氏によると中央に來た場合は綠灰色に見えてゐるが、像の端に來た場合セルリアンプリューに認めており、“これは多分屈折現象によるのだらう”と註されてゐる。因に同氏はシルチスにもこれと同現象を認めてゐる。(後章参照)

シレヌム海は小口徑には一様の濃度に見えるが、15纏以上には部分部分が特に濃く見られ、案外濃淡に富んだ海である。特に尖端部と中央部北側の突出部(**ゴルゴヌム灣**)と後端兩側が濃い。がこれ等の檢出は相當の口徑と熟練せる眼と、そして良視狀を必要とする。

この地區に目立つた模様は上記のシレヌム海のみであるが、南極に近い**チレ I**及び次の地區に續く**クロニウム海**がシレヌムの南部に見え、これ等は渡邊、前田南氏木邊部長等の熟練者を初め10纏以上の口徑には大體見えた様子である。特にシレヌム海の東端附近から南方へカーヴした美しい**シモイス運河**は前田氏に依り美事にキャッチされてゐる。(未完)